

第十七回 東京大薪能 番組表

平成三十年九月二十三日(日) 十六時半開場 十八時開演
 会場／東京都庁舎 都民広場

十八時 入門能楽鑑賞講座 半田 晴久(P.h.D)

十九時頃 天人 渡邊荀之助

能 羽衣 はごろも 天人 渡邊荀之助
 白龍 森 常好 大鼓 柿原 弘和 太鼓 徳田 宗久
 漁夫 大日方 寛 小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔
 盤渉 漁夫 御厨 誠吾

後見 東川 尚史 地謡 今井 基 小倉伸二郎
 川瀬 隆士 辰巳大二郎 隆晋 佐野 登
 内藤 飛能 亀井 雄二

狂言 附子 太郎冠者 山本 則俊 主人 山本泰太郎
 次郎冠者 山本凜太郎

能 土蜘蛛 つちぐも 從者 澤田 宏司 大鼓 柿原 弘和 太鼓 徳田 宗久
 小蝶 石黒 実都 小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔
 源頼光 山内 崇生 大鼓 幸 信吾 太鼓 徳田 宗久
 土蜘蛛の精 僧 辰巳満次郎

能 独武者 森 常好 大鼓 柿原 弘和 太鼓 徳田 宗久
 從者 館田 善博 小鼓 幸 信吾 笛 栗林 祐輔
 從者 梅村 昌功 獨武者の下人 若松 隆

後見 佐野 登 地謡 今井 基 亀井 雄二
 内藤 飛能 辰巳大二郎 川瀬 隆士 小倉健太郎
 内田 朝陽 金森 隆晋 小倉伸二郎
 金森 良充 東川 尚史

《一口講座解説》 渡邊荀之助

祝言仕舞 草薙 くさなぎ 半田 晴久 地謡 山内 崇生
 渡邊荀之助 辰巳満次郎 澤田 宏司

能「羽衣」(はごろも) 盤渉(ばんしき) のどかな春の朝、三保の松原に住む漁夫白龍(ワキ)が今日も釣りに浜にやってくる。すると、どこからともなくかぐわしい香りがただよってくるので、不思議に思いあたりを見回すと、一本の松の木の枝に美しい衣が掛かっている。珍しいので白龍が、家の宝にでもしようかと、持って帰りかけると、一人の女性(シテ)が現れて呼び止め、その衣は自分のものであり、天人の羽衣だから返してほしいという。それを聞いた白龍は、それならば国の宝にしようとなおさら返そうとしない。

天人は羽衣がなくては天上に帰れないと、空をあおいで嘆き悲しむ。その哀れな様子に心打たれた漁夫は、羽衣を返す代わりに天人の舞楽を見せて欲しいと頼む。天人は喜んで承知し、羽衣を着け、月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色を讃えた舞を舞っていたが、やがて霞たなびく天空の彼方へと消えていく。

前半の、白龍と天人の羽衣をめぐる緊迫した構成のなかで、羽衣を返したならば、舞を見せずにそのまま天に上ってしまうだろうと疑う漁夫の白龍に、「いや疑いは人間にあり、天に疑いなきものを」と答え、白龍も素直に「あら恥ずかしや」と羽衣を返す。爽やかな場面で、このやりとりもこの曲を格調のあるものにしていく。

この曲は、舞に太鼓が入ることも分かるように、華やかな浮き浮きとした情緒を多分に持っている。従って、羽衣を奪われた天人の嘆きよりも、それを返してもらった喜びに、シテの心持ちも重点がおかれている。

盤渉の特殊演出は、舞の笛の音色が盤渉調という、高めのメロディになるほか、天人が月へ帰る場面では、能らしい優れた演出となっている。

狂言「附子」(ぶす) 好物の黒砂糖を、家来たちに盗み食いさせないために、猛毒の附子と偽り出かける主人。留守を預かった家来の太郎冠者と次郎冠者は、まるで子供のようになり好意旺盛で悪戯な者達。附子の方から吹く風に当たってさえ、命を失うと脅かされたにもかかわらず、二人は遂に平らげてしまう。果たして言い訳をせねばならないが…。

能「土蜘蛛」(つちぐも) 源頼光は、このところずっと健康がすぐれず病床にふせている。そこへ典薬頭(医薬をつかさどる役所の長官)からの薬をもつて、胡蝶という侍女が見舞いにやってくる。そして、すっかり気の弱くなっている頼光に、治療さえすれば治りますと、慰めの言葉を残して帰ってゆく。すると、いつの間にか病室の隅に一人の僧がたずんでいて、頼光に病状を尋ねながら枕元に近づいてくる。頼光が怪しんでその名を尋ねると、「我が背子が来べき宵なりささがにの、蜘蛛のふるまいかねてしるしも」という古歌を詠じたかと思うと、たちまち蜘蛛の本性を現し、千筋の糸を投げ掛ける。頼光は枕元にあった刀で斬りつけると、確かな手ごたえを残しながら、その妖怪は消え失せる。

物音に驚いて駆けつけた警固の独武者は、頼光の話聞いてあたりを調べると、おびただしく血が流れているので、その血の跡を辿って化生の者を退治に出掛けることにする。やがて、身ごしらえをした独武者は郎等を引き連れ出発し、古塚を見つめる。そこで力を合わせてその塚を崩すと、中から土蜘蛛の精が姿を現し、千筋の糸を繰り出し独武者たちを悩ませますが、ついにそれを退治して一行は都に帰って行く。

祝言仕舞「草薙」(くさなぎ) 三種の神器の一つ、草薙の剣は熱田神宮に祀られるとされる。その熱田に参拝した僧のもとに現れる若き男は、神剣を守る神、素戔鳴尊となった日本武尊であった。

草薙の剣について語り、東夷を神剣にて平定した様子を見せ、平和を寿ぐ。

一日の番組を、めでたく終える慣わしがある。最後にめでたい台詞を短く謡うことを、「附祝言」と言う。今回は謡ではなく、一曲の一部分を舞う、仕舞の形式でめでたく新能を締めくくります。

解説 辰巳 満次郎／能楽師
 堀上 謙／能楽評論家